

# 樹木画テストにおける球形樹冠をもつ図式的表現についての一考察 —青年期心性との関連の視点から—

宮野 素子\*

秋田大学教育文化学部

樹木画テストは、パーソナリティ・テストのひとつとして知られている。特に力動論にオリエンテーションをおく臨床家にはロールシャッハ・テストと並んで活用されている。樹木画は、木の絵が描き手の隠されたパーソナリティの反映であると考えたスイスの心理学者コッホによって50年代に開発された。科学的分析に必要とされる数値化が難しいため信頼性について疑問視されることもあるが、臨床実践においては樹木画テストは臨床家に非常に有益な情報を与えている。本稿では、二人の青年によって描かれた樹木画の特徴的な表現形態—球形樹冠をもった図式的表現—と青年期心性との関連性と意味について検討した。

キーワード：樹木画テスト，青年期，発達論的解釈

*A symbol does not define or explain; it points beyond itself to a meaning that is darkly divined yet still beyond our grasp, and cannot be adequately expressed in a familiar words of our language. C. G. Jung (CW8, para644)*

## はじめに

心理臨床の場で対象者の心理状態や人格特性を理解する方法として、しばしば投映法と呼ばれる心理テストが採用される。樹木画テストは、「実のなる木を描いてください」というシンプルな指示で開始される。スイスの職業コンサルタント Emil Jucker の提案に基づき、同じくスイスの心理学者 Karl Koch によって心理検査として体系化され、わが国でも最も広く使用される投影法の一つである。指示によって描き手は、樹木にまつわる個人の記憶に基づくイメージを思い浮かべる。イメージされた樹木は、描き手の「内的感情や欲求によって無意識裡に変容」(高橋ら, 2011, p.9) し、個性性を帯びた独特の形態で画用紙の上に姿を現す。

筆者はこれまで、担当する心理学関連の授業の中で樹木画テストの集団施行を行ってきた。その中で青年期の被験者によって描かれた樹木画の一部に、樹木と識別できる最低限の構成要素、すなわち根元部分、幹、樹冠が輪郭のみによって描かれたものがあることに気付くようになった。とりわけ樹冠はもっぱら一筆書きのように一本の線で閉じられた円形または楕円、あるいは丸い雲形の形態を持ち、外郭の内部に存在するはずの幹から樹木の縁まで続く枝については不問にされる。最も簡素化された、いわば記号化された樹木画である。描かれた樹木画のもつ個性性をたよりに解釈を試みる検査者の目論見などお見通しとばかりに、漫画デザイン的な樹木の形態は、やんわりと、しかしかたくなに、他者による心の深層への接近を拒絶するかのようである。

本稿では、基礎研究への本格的な展開を視野に入れつつ、樹木画テストにおける球形樹冠およびそれに付随する特徴的な樹木の形態と青年期心性との関連について試論を展開してゆく。

## 1. 人間と樹木—樹木画の背景

### 1.1 象徴としての樹木

樹木は最も多彩な意味を持ち、最も広汎な地域に

2016年1月8日受理

\*Motoko MIYANO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

共有される象徴の一つである。落葉樹は死と再生を、針葉樹と常緑樹は永遠の命を象徴する。地中深くに根を伸ばし、天に向かって上昇する幹と外へ外へと張り巡らせる枝によって、冥府の世界と地上さらには天上の三つの世界を結びつける存在、あるいは世界を支える存在－世界樹－と見なされる。我が国にも、天から降臨する神々の座として特別視される樹木が各地に存在している。世界樹の葉や枝には、神話的動物や死者の魂、生まれていない子どもが描かれる。上昇し下降する太陽や月の住処であり、黄道12宮に対応して12羽の太陽鳥が世界樹の枝に住むと神話は語っている。空高く飛ぶ鳥は精神または魂を表しており、樹冠に住む鳥は高次の精神的存在やその発達を意味している。創世記に登場する楽園の生命の木は世界軸であり、やがてキリストの十字架に象徴されることとなる。ブツダは母親である摩耶夫人の右わき腹から誕生したと伝えられるが、その際、母親は沙羅双樹の枝をつかんでいたとされる。天上世界と地上世界を結ぶ宇宙軸との接触であり、後に触れることになるが普遍的な母の守りを得て、聖なる子どもの出産が果たされるのである。

直立し、成長し、やがて倒れ、落ちた種子は芽吹き新しい命の誕生を知らせる樹木の姿は、生と死と再生のプロセスを共有し、自分自身の魂の座としての身体の写真として、人間と同一視される。Jung (1954) は、「最古の諸観念によれば、人間は木あるいは植物から生まれてくる。木はいわば人間の変容した姿である」(p.195)と述べている(注：傍点は原文のまま)。自然の脅威に抗い曲がった枝や樹皮に刻まれた傷つきの痕跡は、私たちの人生の足跡と重なる。私たちは植樹の儀式に私たちの生命の継承と存続を重ねる。大津波によってすべてを破壊され流された被災地であって、生き残った一本松が多くの人々に未来への希望を与えたことは記憶に新しい。私たちはそこに、厳しい試練に向き合いながらなお立ち上がる私たち自身の姿を見るからである。

樹木は集まって森という社会を形成するが、互いに枝を伸ばし支え合う光景は、社会的存在としての人間のありようと類似している。Kochは著書『バウムテスト 第3版』(1957)の中で、Stanley, H.M.の秀逸な表現を引用して、森に展開される情景を人間社会に繰り広げられる長子存続の原理、間伐の行為に弱者の運命、個人がさらには社会の底に流れる衰退と死と生の運命といったドラマを、私たちに生き

生きとイメージさせている (p.22-23)。

樹木は実をつけることで次の世代を残すだけでなく、その実によって生きとし生けるものを養い、影を作り、その下に保護することから、母なるものの象徴でもある。古代エジプトのイシスとオシリスの物語では、オシリスの亡骸が入った石棺がシリアの海岸に流れ着いたとき、エリカの木が芽生えて、その枝でオシリスの棺を覆ったとされる (Campbell, 1974)。死者は木製の棺に収められ地中に埋葬されるが、母なる木の懷に包まれてさらに根源的な母としての大地へ帰帰し再生を待つことになる。文明は人間に火がもたらされることから始まる。闇を照らす火であり、生命を持続させるエネルギーであり、物質の変容に不可欠な要素である。火は木と木をこすり合わせることから生まれたが、樹木はあらゆる生命力の根源とされる。このような象徴論の知恵は、私たちの無意識の最も太古の層である元型の領域に生きており、私たちは事後的にそのような象徴の背景を知るのである。

## 1.2 自発的に描かれた子どもの絵画にみる樹木

津守 (1987) は、次のように述べる。「子どもの描画は、子どもが自分自身にあてた手紙のようなものである。そこには子どもの世界が表現される。ことに、子どもが描くことに没頭するに至ったとき、その描画には、その子どもの世界の本質が表現される。」(p.17)

重篤な病によって治療入院を余儀なくされた子どもたちが自発的に描いた絵画を集めたSusan Bachの著書『Life Paints Its Own Span』(1993)には、樹木が描かれた作品がいくつか紹介されている。例えば、悪性腫瘍で入院した13歳の女兒は色とりどりの飾りをつけたクリスマスツリー (Bach, 図版38)を描いている。しかし程なくして、同じ少女が全ての葉を落し輪郭のみになったポプラの木 (図版39)を描いたのは、自分の生命が尽きてゆくことを無意識的に予期していたのではないだろうか。8歳の女兒による描画 (図版37)では、赤い屋根の家の横に一本の木が立っている。10本目の枝にはリスが描かれ、この木を齧ろうとしている。この描画を偶然目にしたJungは、枝の数に注目して、この少女の生命が10年を待たなかったのではと尋ねた (p.75)という。赤茶色の窓は右側頭葉に見つかった血腫に、右側に大きく傾いた赤い屋根はその後上衣腫から悪性腫瘍へと進行する、まさに生命の危機に瀕してい

る少女の状況を示しているようである (Bach, p.75)。

たとえそれが後付けの解釈に過ぎない可能性を考慮に入れても、樹木の表現とそれぞれの子どもたちの生命の状況との関連性から目を背けることはできない。病児が樹木の象徴性を意識的に利用したと考える者はいないだろう。心の深層-無意識-が「生命の木」という象徴を選び取ったのである。

## 2. 樹木画テスト

樹木画テスト (Baum Test) は、スイスの心理学者 Karl Koch (1906-1958) によって体系化された投映法に属する心理検査法の一つである。ほぼ同時期、アメリカで John Buck が家-木-人物画テスト (HTP) を公表していることは興味深い。描かれた樹木の絵をもとに心理アセスメントを行うこの方法は、「スイスの職業コンサルタント Emil Jucker に由来 (山, 2011, p.22)」している。人間として樹木と関わりを持たずに生きることはあり得ず、自由画に比べて、樹木を描くことは絵画の技術的な問題に左右されないで基本的な樹木としての形態が確保されればよいことから、比較的容易であり、被験者の抵抗は少ない (高橋ら, 2010, まえがき) とされている。樹木画は、描き手の「深層にある無意識の感情を反映し、心理的な外傷となる過去の体験や、本人が意識の上では認めたくない否定的な特性も表すので、心理的成熟度、精神の健康状態、パーソナリティの特性が、より深く理解できる」(同)。樹木画テストの解釈仮説は、先に述べた元型としての樹木と人間の心理的発達と変容のプロセスという Jung 心理学的視点が基本となることを示している。実際、Koch の著書には Jung がしばしば引用されている。

心理臨床現場で活用されることの多いテスト技法ではあるが、今や数値化された結果をコンピュータに打ち込めば分析から解釈まで可能なロールシャッハ・テストに比べて、Koch が副題を「als psychodiagnostisches Hilfsmittel 心理的見立ての補助手段として」としたように、樹木画テストにおいては検査者が描かれた樹木の姿から描き手の「根本的なありよう (山, 2011, p.24)」を直観的に掴むことを重視する。さらに、心理査定ツールというよりは、むしろ臨床面接の場面における「グラフィック・コミュニケーション (図示的コミュニケーション)」(高橋ら, 2010, p.23) の手段として

の有効性を重視する考え方が強い。心理療法を促す「治療的媒体」(岸本, 2011, p.227) としての樹木画テストだけでなく、描かれた樹木をもとにどのように「見立てる」かは、従って、上述の直観に加えて、Koch による羅列とも見える各指標の解釈を吟味して臨床像としてまとめ上げる力量が解釈する側に求められることも事実である。施行が容易であるにもかかわらず、どのように読み解き治療的にテスト結果を反映させるか踏み入れた道の奥は深い。

## 3. 樹木画テストの実施方法

樹木画テストの実際について簡単に紹介しておこう。標準的な施行方法は、A4 サイズの白画用紙と鉛筆を用意し、「実のなる木を一本描いてください」という教示のみである。本来、樹木を正確に描くためには技術を必要とする。従って、テスト開始に当たりこの作業が上手下手を見るものでないこと、気楽に描いてよいが丁寧に思ったままを描いてほしいことなどを付け加えることがある。おおそ樹木画と判断できる形態を描ける年齢に至れば施行は可能で、さまざまな機能の問題によって描画そのものが困難な場合以外、対象者を選ばない。検査者は、作業時間を計測しながら作業中の描き手の様子を観察する。完成した描画を前に、検査者からいくつかの質問がされることもあり、適切な問いが描き手の自発的な連想を促進する。

画面に描かれた樹木画は、Koch によって分類された指標に従って、さらに描画の発達の側面を考慮に入れながら分析され解釈仮説がたてられる。描かれた樹木は、要した時間、テスト場面における態度、鉛筆線の濃さ、全体像から根元および根、地面、樹幹、枝、葉や枝で構成される樹冠、実、その他の付属物などの細部へと視点を移し、指標とつき合わせて検討されてゆく。構成要素の比率も重要な手がかりとなる。描画の舞台となる画用紙は与えられた空間として被験者の状況を反映するとされ、紙面がどのように使われたかの検討も重要とされ、その際には空間象徴論が用いられることもある。

## 4. デザイン的樹木画-球形樹冠

### 4.1 デザイン的樹木画へのまなざし

筆者はこれまで、担当する心理学関連の授業の中で樹木画テストの集団施行を行ってきた。その中で、主に青年期と呼ばれる発達段階にある被験者に

よって描かれた樹木画の中に、樹木と認識できる最低の構成要素、すなわち根元部分、幹部と輪郭のみの樹冠によって描かれるケースがしばしば見られることに気付くようになった。そして、このような傾向が各々の描き手の個人的な心理的問題の反映だけではなく、青年期という発達段階にある人々の普遍的な心理的状況の反映でもあると考えるようになった。さらに、筆者が注目した一群の樹木画では、樹冠はもっぱら一筆書きのように一本の線で閉じられた円形または楕円、あるいは丸い雲形の形態を持っている。樹幹の輪郭の内部に存在するはずの幹から分かれて縁まで続く枝について言及されることはない。樹幹を構成する葉の一つ一つが描かれることはない。独特の樹冠の形態は、「球形樹冠」として樹木画解釈の指標に含まれている。Koch (1957) によれば球形樹冠を構成する円または楕円は、「相対的な閉鎖性」を示しており、「外側を締め出して内側のものを一つにまとめ」て、緊張を孕んでいることを暗示 (p.170) する。

Kochは58の各指標について集団別に出現率をまとめている。球形樹冠の出現率における発達の検討によれば、男女に共通して、標準児では7歳で23.5%の相対的高値を示した後、いったん減少し、12-13歳で上昇、13-14歳で下がり、14-15歳から再び出現率が上昇している。女兒に比べて男児での球形樹冠の出現が11-12歳では逆転する以外は高くなっている。いったん減少した後に出現、すなわち発達の後で出現した球形樹冠は、早期に描かれたものと比べてはるかに形態的に優れており図式的でないと述べている。出現率の推移について、とりわけ思春期から青年期にかけての興味深い推移について、文化差も含めて新たなデータ収集と検証が必要となるだろう。軽度発達遅滞児では標準児とかけ離れた数値は示さないが、変動は少ない。Kochは各指標について職業別の出現率も提示している。この中で興味深いデータが示されている。職業適性検査として施行された商店員志望者における球形樹冠の50%という高い出現率である。被験者数が男女合わせて66名と小さいが、発達の視点からも当然と思われる二線幹100%および標準と比較すればやや低めであるが二線枝59.1%の次に、集団内の58指標の出現率として他を引き離して高い値である。この結果についてKoch (1957) は、調査対象となることの不愉快さから、中性的で、無難で、同時に蓋をでき

る〔閉ざす形の〕円という形に逃げるのを好んだからではないかと述べている (p.171)。確かに、強制ではないにしろ結果的に心理検査の被験者となる不安と、それに続く不快感は、職業の適正を測定するというテスト状況ではなおさら、当然のこととして想像できる。表面的には教示に従い、取り繕いを成功させつつ、同時に樹木の細部を覆い隠して他者(検査者)の心理的な接近を拒否しているという解釈は、筆者の実感と一致する。

#### 4.2 樹木画の提示

ここで取り上げる二つの樹木画 (Fig.1 および Fig.2) は、デザイン画のような極めて簡素化された表現方法が採用されている。いずれも過去に筆者が集団施行した中で描かれたものである。ともに描き手は、20代前半の女子大学院生である。日常生活において臨床的関与の対象となるような不適応は認められない。提示した樹木画は、本論文の目的を損ねない範囲で個人を識別、特定するような指標について加工が施されている。

Fig.1を見てゆこう。最も特徴的な部分は、先に述べた一群の樹木画同様、最低限の要素である立つべき地平と根元、幹、さらに雲状の球形樹冠部を載せて、樹木として成立させている。個人的なコンプレクスを想起させる指標にかかる要素を一切排除して、簡潔な表現に徹している。描き手の年齢から発達の観点からは、樹冠高と幹の高さの比は10対6.7が標準とされる。樹冠と幹の高さの比率は発達に伴い幹が減少する。この樹木画ではおおそ10対10となっている。漫画的表現であり子どもっぽいとさえ感じられるような樹木画である。

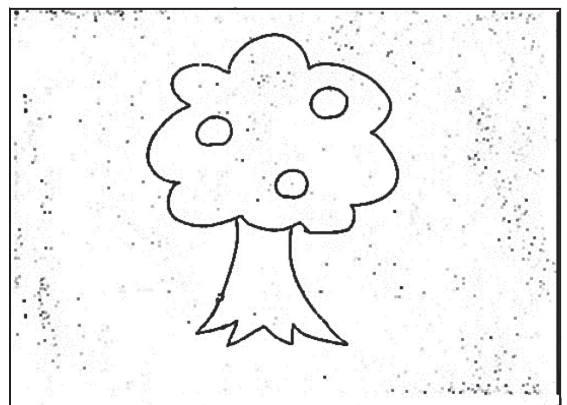


Fig.1

すなわち樹木の形態は、心理的な退行を暗示している。被験者としての適切な対応という外的要請と内的衝動（おそらくは描画行為そのものへの拒否の感情）との葛藤は緊張状況を生じさせる－まさに円および楕円がそれを示している－が、自我の防衛としての退行である。根元と幹部がひと筆で描かれ、閉じている。起こった状況、すなわちテスト状況が緊張を生じさせることとなり、極めて表面的に処理することで切り抜けている。言ってみれば、「一応、ご要望に従って描いては見ましたが、私のことをあれこれとお伝えすることについてこの場では控えさせていただきます」というところであろうか。こういった描画場面における対処方略は、現実場面でこの描き手が馴染みのない状況下においてどのようにふるまうかを示唆している。すなわち、画面全体に対して樹木の占める面積がやや小さめであることから、与えられた空間や状況に対してできるだけ慎重な振る舞いで関わりの範囲を狭めているのである。繰り返しになるが、樹木としての形態は揃っている一方で、樹木の細部を構成する要素は一切描かれていない。樹木の種別－例えば人は葉を見てその木が何の木であるか知る－や個性－例えば枝をどのように伸ばしているかは、その木の持つ遺伝的条件と環境条件によるだろう－に関する情報は語られない。外的な要求には一通り応えていながら、他者に対して自分を閉じて内面を見せないののである。

しかしながら注目するのは、拒否的な描画表現に矛盾するように、描画作業そのものは遂行し、完成した樹木は描画に直面するこちらを見上げる人の顔を想起させる。高橋ら（2010, p.54）は顔様の表現について、それが正面向きの場合、強い自己愛傾向および幼稚さを表していると述べる。隠ぺいと暴露－見せびらかし－の両価性は、強い自己愛と傷つきの回避という青年期心性のありようとも重なる。

Fig. 2はFig. 1と同一人物の作品ではないかとすら思える極めて似通った形態を持つ樹木画である。どちらも画面ほぼ中央部に大きすぎず、小さすぎず、目立たぬように収まっている。

描き手の前に差し出された白画用紙は、それ自体が刺激になり心理的負荷を与える。“中心”の強調は先に述べた青年期の自己愛的心性の反映とも理解できるだろう。また、中央部に向かってエネルギーを収束する動きも暗示している。外へとかかわりを求めて広がる動きの逆である。Fig. 1, Fig. 2のい

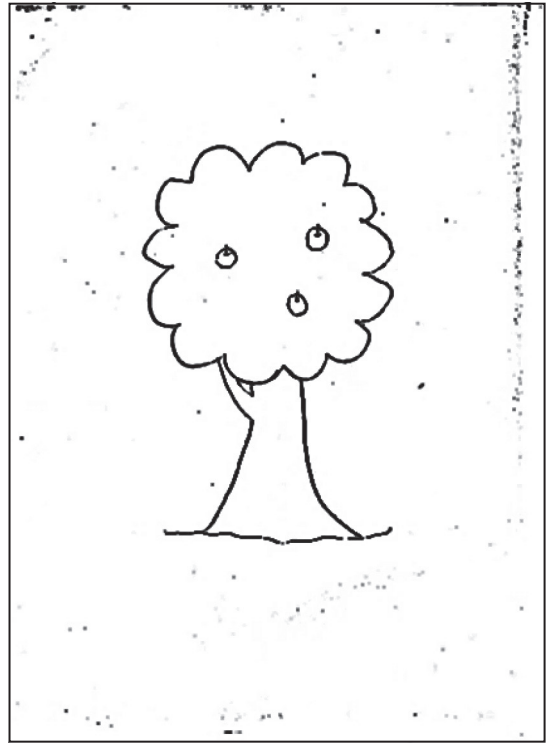


Fig.2

ずれも描画の全体から弱々しい印象はない。円形雲状の樹冠、一筆書き様の輪郭、樹冠に浮かんだ実、そして幹と樹冠高の比率まで同じである。過不足ない筆圧であり、ためらいの跡も見られない描線は、自己を露わにすることへの強いコントロールが働いていることを示す。

Fig. 2の木には、幹から樹冠に向かって枝が伸びている。思わせぶりの左側の枝は、すぐに樹冠の中に隠れてゆく。まるで人間が片手を頭にやって、首をかしげているように見える。Fig. 1と同様に3個の実がついているが、穴のような実ではなく、上部に書き込まれたりんごのじくのような部分によって表情が加わり、一層人間の姿に近くなっている。木全体が人の形をとる表現について、高橋ら（2010）は自己顕示、衝動性、嘲笑的態度を示すと述べる（p.54）。人型表現は小学校の中学年頃に一過性で出現する（青木, 2010, p.558）と言われ、フロイトの精神性的発達段階では、潜伏期に相当する。Fig. 2の描き手はFig. 1同様、20代前半の女性である。こういった人型表現も、筆者の経験では若い女性に多く見られる印象がある。

二つの例を手がかりに、青年期心性と球形樹冠との関わりについて考察してゆく。

## 5. 青年期心性とデザインの樹木画

### 5.1 心理学的見地から

検討した二つの樹木画の樹幹は、真っ直ぐでやや円錐形で、幅はバランス的に太い。樹木において根から吸い上げられた大地の栄養は、樹幹を通り、枝に配分され、葉をつけ実を結ばせる。本能的生命エネルギーが成長の過程で外的条件、すなわち生育環境との関係の中でどのように配分(枝)され、その人の外観(葉や樹冠)を創りあげ、どのような成果(実)を結んでいるかは、描かれた幹、枝、葉、実の特徴が手がかりとなる。特に枝は描き手の個性を知らせる重要な要素である。樹幹からどのように分化しているか、分化した先に折れはないか、先端は鋭利に尖っていないか、先端が開きっぱなしになっていないか等が、描き手と社会あるいは環境との関係性を示唆する要素となる。さらには関係性の中でどのようなパーソナリティが創りあげられてきたかを、私たちは樹木の細部の形態を指標にうかがい知るのである。

樹木画の描き手が属する青年期は、生物学的側面すなわち性ホルモンの分泌をはじめとした身体的変化に始まり、社会的自立が果たされるまでの、個人の発達において誕生後1年と並んで最も劇的な変化の時期である。身体生理的变化と折り合いをつけ獲得された新たな身体イメージを受け入れ、心理社会的存在として社会的生産活動に参入するために、さまざまな課題—進学や就職および自己の能力に直面すること—の解決が要請され、それは心理的負荷を若者に与える。心理的危機の時代である。心理的負荷は青年期の人々に外界からの大きな脅威として受け止められるために、関わる状況から大きく引き下がる必要が生じる。先に述べたように、エネルギーを引き上げて関わりの範囲を狭めてゆくのである。閉じた樹木画のような、彼らが時として大人たちに見せる拒否的態度は、こういった自己保存の衝動に由来する。樹木の枝は、本来、外へ外へと伸びてゆく。すなわち、私たちが検討している樹木画は、成人としてどのように社会とかかわり、かけがえのない“私の木”の具体的な像がまだ描けないということなのかもしれない。

青年期の人の樹木画には、樹冠に数個の、時には

不釣り合いなほどの数の実が描き込まれることも多い。果実がその先についているはずの枝はなく、樹冠の中に浮かんだ実である。“成果”を切に望みながら、結実されるべきものがどのように現状とつながりを持つのか未だ明確でない、一個の自立した人格として形成途中である青年期の人々の状況を示している。青年期危機の一つの特徴としてEriksonは自我同一性における「時間的展望の拡散」をあげている(鏝, 1990, p.77)。過去・現在・未来と途切れることのない時間感覚の喪失である。樹木画を、過去をそれと認識し、未来を展望した、現在の個人の姿の反映とするなら、それらの時間の有機的なつながりを模索の現状を検討した二つの樹木は語っている。

### 5.2 脳科学的見地から

脳の発達において前頭前皮質の容積は青年期の初めにピークに達するが、青年期から成人期にかけて、細胞と細胞間を連結するシナプスで構成された灰白質容積が小さくなる。このことは高度な認知と論理的思考を行う前頭前皮質において余分なシナプスの刈込が行われていることを示している。このことによって脳における情報の処理回路が洗練されて行くのである。脳の「刈り込み」作業は、樹木がその環境において適応的にかつ十分に生き残るための剪定作業にも重なり、球状樹幹やデザインの表現は見せるべき完成形の自己像をまだ結んでいないことを示していると言えないだろうか。脳の完成は、前頭前皮質の構造と機能が完成する20代後半から30代を待たねばならない(Carter, 2014, p.212)。特に情動を合理的に処理する能力が青年期では未完成であることは、青年期の感情的反応や衝動性を説明しており、私たちの樹木画においては、検査場面というストレス状況下における不安と拒否の情動反応への対処法略としての表現形式と言い換えることもできよう。

Spear (2000)によれば、ヒトだけではなくさまざまな種において青年期の前頭前皮質および辺縁系における変化が顕著であることが分かっている(p.417)。ドーパミン作動性の調節系の源とされる中脳黒質および腹側被蓋野は前頭前皮質と辺縁系を含む領域を支配し、例えば“報酬系”の機能への関与が知られている(Bears, et.al, 2007, pp.389-391)が、ドーパミン濃度の増加と前頭前皮質における神経線維の密度の増加は青年期に顕著という(Spear, 2000, p.440)。ストレスの影響を受けやすいこれら

の領域の変化は、成人の脳と青年期の脳が解剖学的にも神経化学的にも異なる構造と機能をもつことを私たちに教えている。結果、青年期の人びと特有の認知と行動様式として反映される。さらに、この時期、女子の自己評価が低下する調査結果が報告されている (Spear, 2000, p.429)。性差による樹木画表現の異同についてさらにデータを得て分析する必要があるだろう。

このように高度な科学技術の進歩は、発達における脳の構造と機能の変化について私たちに日々新たな知見をもたらしており、樹木画における指標の新たな解釈の可能性にも開けている。Spear (2000) は、青年期に特徴的な行動が脳内の変化に起因することは、青年期の人々の行動が生物学的に決定されている側面をもつということだが、同時に、それはゴールではなく、社会との関わりや体験によって修正されてゆくものと述べている (p.447)。このことはまさしく、生物学的に決定された側面と環境との関わりによって個性を獲得してゆく樹木のありようを人間の姿と重ねてきた先人たちの直観をまさに言い当てている。

## 6. 今後の課題

青年期に固有の反応様式として樹木画における球形樹冠および図式的表現という形態に着目し、青年期心性との関連について検討を試みた。樹木画テストに関する研究は、これまで事例研究を主体とした質的研究および提示・言及が主流であった。臨床場面で治療的介入の有効な媒体として、心理療法家は言語にならないクライアントの心の声を描かれた樹木の姿からくみ取る、あるいは樹木画を両者の重要な中間領域として機能させるといった、精神力動論的立場での使用が樹木画法の中核とされてきた。実際の治療場面における有効性に疑いはなくとも、Kochから60年を経て、テストとしての樹木画に立ち返りその構造と機能について再検討する必要があるのではないだろうか。佐渡 (2011) は、わが国における2009年までの樹木画テストを取り扱った研究論文696編について方法論の検討を行っている。その結果、実験手法を主体とした基礎研究の不足、追試の不足、レビュー論文の不足、臨床群の特性における偏りを指摘している (p.29-30)。わが国に導入されて以降、2000年ごろまでは数量化研究が最も採用されているが、それ以降は事例研究を主体とした

質的研究および提示・言及が主流となっているようである。Kochは58の指標について集団別の出現率を算出しているが、調査およびデータ処理の方法の詳細は不明の部分も多い。こういった統計的分析研究は今後の課題であろう。

今後、因子の検討や分析方法の吟味といった基礎研究としての方法論を精査することはもちろん、広範囲の樹木画データの収集が課題となろう。また、脳画像処理技術の進歩は脳の構造と機能について新たな知見をもたらしていることから、人間の精神活動の理解のアプローチの幅の広がりとともに、樹木画テストもこれを受けて、研究領域の枠を超えた視点の獲得と解釈の可能性に開けていると思われる。

## 文 献

- 青木健次 (2010) 「バウムテスト」『心理臨床大辞典・改訂版』氏原寛他共編 pp556-561
- Bach, S. (1990) *Life Paints Its Own Span: On the Significance of Spontaneous Paintings by Severely Ill Children*, Daimon, Einsiedeln
- Campbell, J. (1974) *Mythic Image*, Princeton University Press (山下主一郎その他訳『神話のイメージ』大修館書店1991年)
- Carter, R. (2014) *THE HUMAN BRAIN BOOK*, 2<sup>ND</sup> EDITION, DK, London
- Bear, M.F., Connors, B.W. & Paradiso, M.A. (2007) *Neuroscience: Exploring the Brain*, Third edition, Lippincott Williams & Wilkins/ Wolters Kluwer Health (加藤宏司他監訳『神経科学－脳の探求－』2007年 西村書店)
- Jung, C.G. (1954) *Der philosophische Baum, in Von den Wurzeln des Bewusstseins; Studien über Archetypus* (Psychologische Abhandlungen IX), Rascher, Zürich (老松克博監訳『哲学の木』創元社 2009年)
- Jung, C.G. (1926) "Spirit and Life", *THE STRUCTURE AND DYNAMICS OF THE PSYCHE*, THE COLLECTED WORKS OF C.G.JUNG. VOLUME 8, tran. Hull, Routledge London 1987
- Koch, K. (1957) *Der Baumtest. 3 Auflage: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel* (岸本寛史, 中島ナオミ, 宮崎忠男訳『バウムテスト第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房2010年)

- 佐渡忠洋 (2011) 「バウムテスト研究の可能性」岸本寛史編『臨床バウム－治療的媒体としてのバウムテスト』誠信書房 pp.28-43
- Spear, L.P. (2000) “The adolescent brain and age-related behavioral manifestations” *Neuroscience and Biobehavioral Reviews* 24 pp.417-463
- 高橋雅春, 高橋依子 (2010) 『樹木画テスト』北大路書房
- 鐘幹八郎 (1990) 「アイデンティティの心理学」講談社現代新書
- 津守 真 (1987) 「子どもの世界をどうみるか 行為とその意味」NHKブックス
- 山 愛美 (2011) 「バウムテストの根っこを探る－秘密は木の根に隠されている」岸本寛史編『臨床バウム－治療的媒体としてのバウムテスト』誠信書房 pp.11-27
- The Herder Symbol Dictionary (1986) Chiron  
*THE BOOK OF SYMBOLS: THE ARCHIVE FOR RESEARCH IN ARCHETYPAL SYMBOLISM* (2010)  
TASCEN Köln

### Summary

Tree Test is one of the prominent personality tests, especially popular among psychodynamically oriented clinical psychologists like Rorschach Inkblot Test. It was developed by Swiss psychologist Karl Koch, who found the tree drawings reflect hidden aspects of personality, in 1950's. Although there has been criticism claiming it substantially less reliable because of the difficulties to translate what is expressed on the paper into numerical scores for scientific analysis, Tree Test gives psychologists extremely useful information about the clients who he/she might be. This paper discuss significance of particular forms; graphic feature with ball shaped crown, of the tree figures drawn by two adolescents, finding relevance between tree and the psychological feature of adolescents.

**Key Words** : Tree Test, Adolescence, Developmental significance

(Received January 8, 2016)